

# 仙台教区 復興支援活動ニュースレター

## 4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗  
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12  
 カトリック仙台司教区事務局  
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378  
 義援金振替口座：02260-9-2305  
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

横浜教区の東信地区では、このたび「東北支援・YSグループ」が巡礼の旅を企画しました。YSとは、「善きサマリア人」の略です。メンバーは皆、「善きサマリア人」を生きる目標に置いている人々です。今回は、全員で被災地巡礼の後、ボランティア活動をするグループと別れました。巡礼の旅については、佐久教会の吉越勲さんが、ボランティア活動については、御聖体の宣教クララ修道会のシスターサラが書いてくださいました。

また、八木山教会オリーブの会を支援している五井教会の信徒会長さんが、3.11の亙理教会で行われた追悼のミサに出席し、訪問記をお寄せくださいました。

今後も、いろいろな教会の方の被災地訪問などを掲載したいと思っております。

### 横浜教区・東信地区

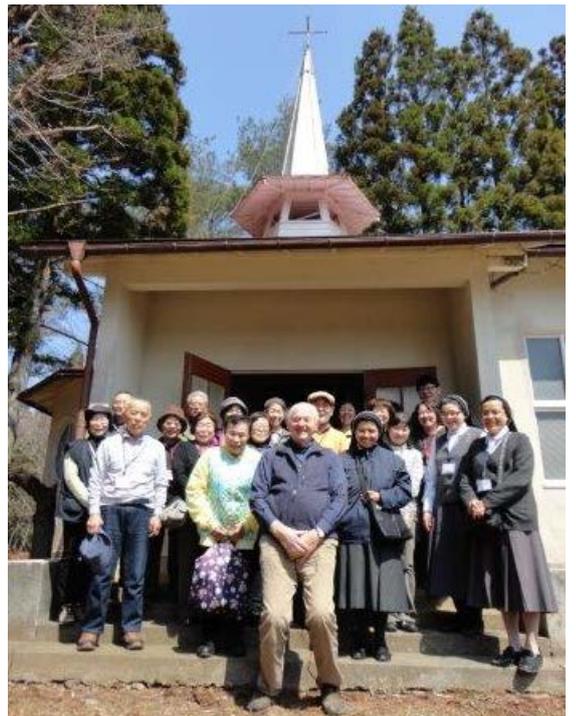
## 東北支援 YS グループ企画の巡礼の旅

カトリック佐久教会 吉越 勲

縁あって、今回、東日本大震災の被災地と殉教の地をめぐるツアーに参加させていただいた。私にとって被災地を訪れるのは初めての体験で、これまでボランティア等に参加したこともなかった。ただ、ツアーのパンフレットを目にした時、「これは自分にとって必要なことでは」と感じるものがあり、参加させていただくことにした。

宮城県石巻市の大川小学校の廃墟は、衝撃的だった。襲いかかった津波の威力をそのまま形に残したような建物の姿を前に、子どもたちの悲鳴が聞こえるような錯覚にとらわれた。同校では避難の誘導がうまく行かず、多くの方々が犠牲になったという。実際に、校舎のすぐ裏手にある山に視点を移したときに、そこに登ったなら難を逃れられたであろうことが、素人目にも即座に分かった。ご遺族の無念を思うと、言葉もない。事実を前にしても、「そうでないこともありえた」という可能性があるという苦しみは、どれほどのものだろう。

夜、宿泊させていただいた海辺の民宿「下道荘」は、震災と津波で宿舎が全壊しながらも、高台に宿舎を再建し、再び経営を軌道に乗せられていた。豊かな海の幸が並ぶ夕食の後、若女将さんが被災の体験を語ってくださった。避難所で恐怖の一夜を過ごしたものの、幸いにご家族は無事で、壊されずに残った宿舎の二階から営業に必要な品物を必死に集め、乏しい水で洗浄されたそうだ。大変なご苦労だったと思うが、若女将さんは「本当に、



カトリック大籠教会前にて  
 肋・赫スティック神父様(中央)と巡礼の旅参加者

いいところなんです。また、ぜひ来てください」と笑顔で話された。海が苦しみをもたらすことがあっても、私たちは海の恵みで生かされ、海とともに生きていく、と。

一夜が明け、前日の雨模様から一転、空は快晴で、高台から見下ろす海は青く、穏やかだった。次に私たちは、大籠、米川のキリシタン殉教の地の遺跡を巡った。殉教者の血で赤く染まった



カトリック米川教会 聖堂

という川、首実検をする役人が座ったという岩。そこもまた、穏やかな自然に囲まれた場所だった。まるで、何事もなかったかのように。

自然は、怒りもせず、恨みもしない。地震や津波もまた、人を選ぶことはないのだ。そんなことを思った。

人に与えられた苦しみは、本人の罪のためか。その問いに、イエズス様は「神の業が現れるためである」と仰せになった。神様が、この世界や私たちをそのように創られたのであるならば、私たちは人の苦しみに想いを馳せなくてはならないと思う。そしてまた、自らが苦しむときには、その意味を問わなくてはならないのだ、と改めて感じた。

## ボランティア体験による祈りの変化

御聖体の宣教クララ修道会 シスター サラ・サントス

4月11日～12日、横浜教区の東信地区、東北支援YSグループ企画の巡礼の旅に参加した私たち（御聖体の宣教クララ修道会）3人は、12日午後、カリタス米川ベースへ到着しました。この巡礼グループから、私たちの他4人が、ボランティアに参加するために米川へ残りました。

被災地でのボランティアは初めての経験で、とても緊張していた私たちですが、ベースでの初めての夜に、家庭的で温かい雰囲気を感じ、少しほっとしました。

13日のボランティアの活動は、8人ずつ2つのグループに分かれ、2カ所へ出かけました。私たちは、ワカメのお手伝いに行ってきました。

漁師さんは、とても明るい方でした。大変な経験をなさったのに、とても前向きに生きていらっしゃるって、私たちは感動しました。被災当日の津波の凄さも話してくださいました。仕事が終わる前に漁師さんは、おいしい牡蠣をごちそうして下さいました。皆でおいしく頂いて、感謝して帰りました。

14日は、牡蠣のお手伝いに行きました。この日の活動は、牡蠣挟みでした。牡蠣の子どもがホタテの貝殻についているのを見て驚きました。とにかく見る物すべてが珍しく、慣れない仕事ではじめは大変でしたが、すぐに漁師さんもビックリするほど早くなり、楽しく活動出来ました。



私たち3人がメキシコ人だと知って、漁師さんは、以前、数カ月メキシコに住んだことがあると話してくださいました。覚えている単語すべて使って話してください、嬉しかったです。この日も、新鮮な牡蠣をおいしく頂きました。

私たちは修道院で、今までも毎日、被災された方々のために祈っていましたが、今回、実際に被災地に来て、ボランティアを体験したことによって、祈りが少し変わりました。具体的に出会った方々の顔や光景が浮かび、またベースで奉仕してくださっているスタッフの皆さんのためにも祈るようになりました。

そして、まだまだ復興のためには厳しく、遠い道のりが続くことも実感しました。恵みによって、また機会が与えられたら、再びここに戻って来たいです。



南三陸での漁業支援



米川ベースにて、ボランティアさんとモアイ像とともに

## 3. 11 亙理訪問記

カトリック五井教会 石川 直

3月11日8時30分、宮城県亙理町の仮設住宅集会所へ向けて、カトリック八木山教会から車に分乗して、17名（内男性6名）で出発しました。

9時30分到着。10時から交流会が始まりました。五井教会からのマフラー、全国から集まった着物や帯などを並べて、20数名の被災者の方がくじを引いて（3回）、その都度、引いたくじの番号順に欲しい物を選んでいられました。

その後のお茶会では、3列の長テーブルに向かい合って座り、話が弾みました。私の前に座られたおばあさんは、89歳で、2階からヘリコプターで助けられ、避難所を転々として5月に仮設に入ったと言われました。

隣に座られた方も、ハンディキャップのある娘さんを抱え、ヘリコプターで助け出されたと話されました。今は生かされた命だからと明るく、良い笑顔をなさっていました。



お茶会の後、みんなでお弁当を食べ、一人一人に自分の写真が載った「卒業アルバム」が手渡され、お茶会はお開きになりました。

今まで遠く千葉の方から支援していただき、ありがとうございますと感謝されました。この仮設の人たちは、船、家が全滅になった荒浜地区の人たちでした。(他に亘理町には4か所の仮設住宅があります。)被災者が身を寄せているこの仮設住宅の人々も、復興住宅が出来てそちらに移られたり、自宅を再建されて移っていかれたり、以前は90世帯が住んでいましたが、1月末時点で55世帯となり、その後も次々と減少して、5月頃には閉鎖になる予定です。

八木山教会ボランティアグループ「オリーブの会」による仮設住宅の支援も、3月を一区切りにして第2段階に入るようです。

午後、私たちは亘理教会に移動しました。午後1時30分からの「犠牲者追悼と復興祈願ミサ」にあずかりました。今年は、平賀仙台教区司教が亘理でミサをささげられるとのことで、その3・11ミサにあずかることができ、幸いでした。

30名位入る聖堂で小さな教会でしたが、隣の会議室のモニター画面で参加している方もいました。亘理教会の信者さんの中には、家族を亡くされた方もいらっしゃいました。司教は、まだ20万人以上の方が避難生活を強いられているということで、これからも「寄り添う」支援をお願いします、と話されました。

主任司祭は、グアダルペ宣教会のホセ神父で、県南4つの教会を一人で担っています。その県南4教会の一つである亘理教会を八木山教会が支援していました。

今年の3・11を亘理で迎えることができ、意義深い追悼の一日となりました。私は、2011年10月、まだ震災の傷跡生々しい現地を見ましたが、その後、海岸の岸壁は修復され、田畑の瓦礫も片付けられ、水路も復旧し、塩害も雨で洗い流され、お米も取れるようになったそうです。また、私たちが取り寄せていた豆腐屋さんの販売も伸びてきているそうです。亘理町荒浜地区の復興は、順調に進んでいるようですが、お隣の山元町の復興は遅れているようで、被災地の事情はそれぞれ違いがあるようです。

仮設を出た方たちが移っていった場所で、どのように過ごすのか、居場所を見つけることができるのか気になり心配です。



亘理教会にて、犠牲者追悼と復興祈願ミサ



亘理町荒浜地区の慰霊碑前での祈り